春夜宴二桃李園一序　―現代語訳―

そもそも天地というものは、万物を迎え入れる旅館のようなものであり、時間の流れというものは、永遠の旅人のようなものである。ところがはかない人生はまるで夢のようである。喜び楽しんだとしてもいったいどれほどの時間であろうか（どれほどもない）。（だから）昔の人がともしびを持って夜まで遊んだのも、実にもっともなことである。ましてやうららかな春がかすみたなびく春景色で自分たちを招き寄せ、万物の創造者が自分たちに文章を作る才能を貸し与えてくれるからには、なおさら（楽しく遊ばないではいられないの）である。桃や李（すもも）が美しく咲きほこる花園に集まって、肉親の間の楽しみを繰り広げる。大勢の優れた年少者たちは、皆、昔の謝恵連のよう（に詩がうまい）。（ところが）私の詩だけはまずくて、（恵連の族兄の）謝霊運には及ばないので恥ずかしくなる。心静かに風景をめでる楽しみは尽きず、世俗を離れた高尚な談論はいよいよ清らかになってゆく。（このような）立派な宴席を設けて花に向かって座し、すずめが羽を広げた形の杯をやり取りして、月をながめては酒に酔う。（このよい気分のときに、）立派な詩ができないならば、どうして風流の思いを述べることができようか（述べることなどできない）。もしも詩ができなかったならば、罰は、昔の金谷園における罰杯の故事にならって、三杯の酒を飲ませることにしよう。